

●講義の目標設定

筆者は、大学で刑法の講義を担当している。刑法を含む法学を通して学生に身につけてほしい能力には、次の二つがある。第一に、法的な概念を正確に理解すること、第二に、法的なものの考え方を身につけることがこれである。

このどちらを重視するかが問題となるが、筆者は、後者の法的思考能力を重視している。それは、法学を学ぶ学生の多くは、弁護士などの法曹ではなく、会社員や公務員になるのだが、そこで法的素養として求められるのが、関係法令や内規を用いて問題を解決する能力であることによる。

また筆者は、授業の目的や方法は、「大学・学部の育てた人材像」と連動すると考えている。早稲田大学はその教旨に「学問の活用」を掲げており、早稲田の学問は、現実に応用されることで完成する。すなわち、所属機関との関係でも、法の使い方（法的思考）を重視するべきことになるのである。

●目標達成のためのアプローチ——双方向授業

目標達成のために、筆者が採用したのが双方向授業である。

●私の授業実践——教育現場の最前線から

双方向授業——何を聞き、どう進めるか

仲道 祐樹 ●早稲田大学社会科学総合学院准教授



学生は「あれ？」という顔を始めるので、そこで今回のテーマとなる条文を指示する（ここでは、刑法三六条一項の正当防衛が問題となる）。

手元には条文があり（学生は六法を持参している）、目の前には解決すべき事案がある。これで準備が整う。学生にはまず、自分が賛同する結論に挙手してもらう。穏当な理由づけになりそうなほうから学生を当て、その理由を聞いていく。その際、理由は直感でもかまわないことを担保する。そうすると、「人を殺そうとしているから正当防衛とは言えない」といった理由が出てくる。数人の意見をまとめ、今度は無罪側の意見を聞く。無罪側からは、「結果的に身を守ったのだから、正当防衛でよい」といった理由が出てくる。すると、

まず、スライドに簡単な事例を示す（Xが、殺意をもってAにピストルを発射した。弾丸が命中しAは死亡した）。次に、少しひねった事例を示す。例えば、先ほどの事例で、Aが死亡したが、AもまたXを殺害しようとしていたのであり、Xは図らずも自分の身を守った、というような具合である。事例をひねると、

今度はボールが有罪側に返ってきて、理由の応酬が成立する。

これにより、①条文を使って問題を解決するには、解釈が必要であり、複数の解釈が成り立つ場合には、理由づけの説得力が決め手となることを理解し、②説得力のある理由づけとは何かを議論を通じて考えてもらうことを意図している。

●双方向授業で「聞いてはいけないこと」

双方向授業を行う際に心がけているのは、「正解／不正解のある問いは聞かない」「理由づけだけを聞く」ということである。「正解／不正解のある問い」を発するとき、教員側は非常に簡単な問題を出す（例：日本の中央銀行は？）。多くの場合、それは授業のマクラにすぎず、それに学生が答えてくれることを前提に、次の話題に進もうとする。

しかし、これは学生側から見たら、相当に分の悪いゲームである。なぜなら、この問題は正解できて当然、間違えたら恥ずかしいというハイリスク・ノーリターンの代物だからである。そこで挙手をして積極的に答える学生は普通はいないし、発言したのに間違えた学生は自信をなくしてしまう。

逆に、理由づけには「正解／不正解」はない。理由づけの善し悪しはあるが、法律学は通常、大学に入って初めて学ぶ分野であるから、最初は全員、法的な理由づけが下手であるだからこそ、理由づけは直感でもいいと担保できるし、巧拙さまざまな理由づけが飛びかう中で、いい理由づけの方法を学ぶことができるのである。

●このスタイルの課題

もつとも、この方法にも課題がある。それは、発言したことによって満足し、自説に固執する学生の存在である。この種の学生は、発言回数は多いものの、試験の点数は芳しくない。法的思考の形式が身についておらず、異なる解釈の可能性を考慮しない、独りよがりの答案になっているのである。

筆者は学生間の議論を重視してきたが、その中で、反対側の意見に納得せず、自説が正しいと確信（強く誤解）してしまふ学生を生んでいるのだと思われる。さらに勉強すれば自説の欠点にも気づくのだが、すでに当該学生にはそのインセンティブが失われている。なぜなら自分は正しいのだから。

どうしたものかと考えていたところ、ある刑事法学者が書かれた次の文章が目にとまった。「私の理解するソクラテック・メソッドとは……『受講生を説得する』教授手法というものである。……この理解は、直接、ソクラテスの対話手法から来ている。……疑問を提起した弟子を説得し、最後に『師の言われる通りです』と言わせるのである」（田口守一『刑事法学点描』22ページ）というのがこれである。

これまで筆者は、可能ながきり、学生に達成感を与えようとしてきた。しかし、それが前述の学生を生み出す原因となっているのも事実である。学生にインセンティブを与えるためには、学生の「自説」を論破し、適度な不足感を与えることが必要となる。今後は、その方法を探ることが課題である。